

部落問題文芸作品選集

第11卷

渡邊霞亭

殘月（上）

世界文庫版

部落問題文芸作品選集 第十一卷

昭和四十九年六月二十六日発行

発行者 松本富夫

発行所 株式会社 世界文庫

東京都目黒区洗足二―二二―一五
電話(〇三三) 七一六 六一五一(代表)
(七二三) 九二四四(夜間)
振替 東京 七八四九八番 千一五二

落丁、乱丁本はお取替えいたします。

残月目次(上卷)

おぼろ夜	指環	成功の光	失敗の暗	千軒鑛山	犠牲	合巹	水と油	里歸り
.....
一	三五	四八	六三	七八	九七	一三〇	二六七	二九〇

殘月

渡邊霞亭作

おぼろ夜

一

「お嬢様、此方へお越し遊ばせ、南の東屋にそれはく美しい花が咲いて居りますよ」
友禪縮緬と紫襦子との晝夜帯をお太鼓に結んで、銘仙の綿衣をきりりと着た十八九の
婢女が、楓の裁籠をせかく脱けて、心得顔に案内する背後から、櫻の精を一身に鍾めた
かと思ゆる水郡家の令嬢武子が徐に庭下駄を運ばせる、年齢はまだ二十歳の上は出まい、
すらりと高い脊に濃納戸地へ利休鼠の立縞を現はして優好織の小袖を着て、白茶地へ金銀
の色紙を置き、その上へ桐と菊花の模様を見せた朱珍の帯を締める、目許から口元、鼻筋

おぼろ夜

一

の通つた點に、氣高い人格と、堅い意志とが現はれる。

庭は極めて廣い、泉水假山の物數奇こそ無いが、無雜作に有らゆる灌木を栽籠にした間へ、風流な東屋と石燈籠とを配置したのが、自ら天然の趣を爲して居る、婢女の云つた南の東屋といふのは、庭の盡處の小高い處にある。

武子はこの東屋のだら／＼坂を登つた、餘り急いだので息ぎれがする、然し、東屋の下から塀際に掛けて、一面に咲き亂れた一株の美しい花を見ると、息切れも何も皆な忘れて「まあ、奇麗な事」とうつとりする。

日はもう暮れさうになつて居た、武子がこゝへ來たときは、名残の夕陽が只一線花の上へ春いて居たが、暫くするとこれも消えて、白く雪のやうであつたのが、淡墨をほかした如く異つて來る、甲山からおとして來る夕風に、三片五片ちら／＼散る、夫はうつすらと出たおほろ月の端が缺て落るのではないかと疑はれる。

武子はこの花の落着く先を見詰て居た、生れた枝を離れた花は、身を離れた靈魂の如なものであらうか、それとも父母の手を去つて、遠所に流浪する憫れな女の身の上に似て居

るのであらうか、それともまた小さい蟲が胡蝶に化つて、虚空遙に飛び歩くだ得意さを感じて居るであらうか。

武子は考へるとも無く恁様事を考へて居ると、護謨草履の周圍に咲いて居る董の花が、床しい裾を昇つて来る、櫻の精が霞になつて、それが武子の身を取り巻く、上には朧月下には花のいろく、その間に夢の如く立つ武子は、心に月の精を持ち身體に花の姿を見せる。

おほろ月の光りが薄くなるほど、花に被つた暗の色は深くなる、前に案内をした女中のお大は、武子の立つて居るすぐ前の切株に腰を掛け、後から武子を追ひ掛けて来た小間使のお富は東屋の柱に身を憑せて忙然と花を見詰めて居る、武子は急に思ひ出して、お大を見返つて、

「お兄様のお客様はまだ在らつしやるのか知ら」と訊ねた。

「まだ在らつしやるやうでございます、ね、お富どん」

「わたしが此方へ参りますときは、お話聲が聞こえて居りました」

「お客様、誰方？」

「福田様の番頭さんださうでございます」とお大は少し見當の異つた目を武子に注いで「わたしお紅茶を持つて参りましたときは、何だか存じませんが、泣くやうに云つて旦那様を拜んで在らつしやいました、何かお頼みなさる事がお在りなうでございます」

「お兄様、お肯ぎぢやなくつて？」

「熱くは分りませんが、頻りに謝絶つて在らつしやいました、お金でも拜借に來らしたのぢやございませんか」

お大が覺束無さうに斯う説明するとき、花一簇を距てた塀の外で

「お父さん」と高く呼んだ人があつた、東屋の談話はこれで途切れる。

「おい信吉か」

次に起つたは元氣のない咳噎れた聲であつた。

武子は聞くともなく聞く

「お父さん、お迎ひに参りました」續いて前の聲がした。

「迎ひなんぞ来て呉れなくつても、まさか道にはぐれる事はないよ」

「ですけれど、旦那の御心配を見て居る事は爲きませんもの、」と次第に急々とした語調になつて「それで都合は何うでした」

「駄目々々」と咳噎れた聲は投げるやうに

「何うお願ひしても肯いては下さらない」

「爾うですか、駄目なんですか、」と失望を籠めて云つたが「ぢや、他に金策のお見込がありますか」

「他にある程なら、水郡さんに頭は下けんや」

「夫ぢやどうして旦那の危急をお救ひなさるお意です？」

「今は百計盡きて了つた、これが澤山な御無心ぢやなし、僅か五百圓の事だから快く肯いて下さるだらうと思つたのはわしの自惚だつた、水郡さんと旦那とは、三年前から妙に纏

綿つた間柄になつて在らつしやる、俺們が手を合せてお頼みしても、五百圓は扱置き、五十圓の融通も斷る、全體福田が男であつたら、わしに向つて金談なんぞしない筈だ、と頭から相手になつて下さらない、わしも實際閉口したよ」

「だつて空手で旦那のお宅へお歸りなさる事が爲きますか」

「爲きない、夫が爲きる程なら此ほどの苦勞はしない、然し、貸さないと云つてる人に、頭を下けても功は無いよ」

「此だけのお宅に、五百圓位ない筈は無いでせうがなあ」

「無論あるさ、けれど有つても貸さないと被仰るんだ」

「五百圓のお金が無くて、旦那を救ふことが爲きますか、今日は十三日ですよ、明日は鑛夫に給料を遣らなけりやなりませんよ」

「夫だから氣を揉んでる」

「先月の末にも、半金しきや渡してないでせう、其處へまた明日仕拂日に三分一で忍耐しろとは云へますまい、重立つた事務員には事情を云つて待せるにしても、飯場の奴だけに

は、奇麗に仕拂つて遣りたいですね」

「明日金を遣らなかつたら、何様事をするか知れやせん」

「爾うです、此方の出やうが悪かつたら、鑛坑も精錬所も、破壊して了ふと云つてるさう

です、もしそんな亂暴をされでもしたらそれこそ大變な結果になりますよ」

「旦那の御心配もそこにある、然し血も涙もない金持の前で、百萬遍お辭儀したつて仕様

がないから、一度歸つてよく相談をして見る意だ」

「相談がお金にはなりません、仕拂は明日に迫つて居ます、わたし一度水郡にお願ひして見

ませうか」

「駄目々々、俺們があればどお願ひして、お聞き入れのないお金を、お前が願つて肯いて

下さらうとは思はれない、舌を動かすだけ損だ、それより歸らう」

「歸つたつて借りに行くさきはないではありませんか、心切があつて金のない人の前で、

聲を囁らしてお頼みするよりは、心切のないお金持にぶつ突かる方が優でせう、自分の欲

ですのぢやありません、旦那の危急を救ふ爲めに願ふのです、お父さんは一歩お先へお

歸り下さい、わたし一生懸命に願つて見ます」

その聲が悲調を帯んで、花の間から傳はる、武子は沈と聞いて居た。

三

「お嬢様 お寒くはございませんか」

お大はそつと心付けた。

「いゝえ」と武子は微聲で云つて、思ひ出したやうに衿を搔合せ合せる、その左の紅指に金剛石の指環がぴかりと光つた。

「この金剛石は八百圓で買ったのだ」と心に思ふ。

「こゝの旦那は聾で在らつしやる、お前が何れほど大きな聲でお願いしても、聾には聞こえやしない、塀外の咳噴れた聲はまた云つた。

「わたくし、きつと聞いて戴きます、お金を持たなければ二度とお目に掛りません、お父

さんは安心して歸つて下さい」此の聲に總てを抑へ付ける程の力が籠つた。

「成きりや可いが……」と咳噴れた聲は危ぶむ。

「必ず遣つて見せます、然し、他にお心當りがありますか」

「外には無い、金に爲る物は皆な賣つた、價格のある物は悉く抵當に入つて居る、此の上は我々親子の命をさし出して、融通を付ける他策はないが、誰も命を買つて呉れる者はない、御先代から御恩になつて、妻子眷屬安穩に生計を立て、來たのも全く主人のお蔭なんだ、その大恩をお報しするのは今日にある、もし、わしやお前を抵當に取つて呉れる者があつたら、一生下男奉公に朽ち果て、も關はない、こゝで五百圓の金を借りる、明日までに五百圓の金が無かつたら、從來に二十萬圓からお掛けになつた千軒鑛山が破壊されて了ふ、鑛山が破壊されたら福田家も覆へる、我々家來も無論破滅する、我々は何うなつても厭はんが、大阪の難波で屈指の舊家と呼ばれた主人の家を壊す事は忍びない、わしはこれを苦勞する、然し、金ばかりは仕方がない、先代がお逝去になるときわしの手をお取りなすつて、金兵衛後を頼むぞ、慶三はまだ壯いから、無理な仕事をするかも知れない、猪武

者の如に、前へくと進みたがるかも知れない、けれど無理は破滅の基進むことを知つて守る事を知らない者は、到底大事を成し遂げる事が爲きない、わしの死んだ後で、わしに代つて呉れるのはお前ばかりだ、どうか頼む、慶三の事を頼む、と滲々被仰つた、わしは彼のお詞を思ひ出すたび、此の胸が一ぱいに爲る、旦那もわしの言ふことは克く肯いて下さる、わしの様なものでも親旦那の御委託を受けて居ると思召すから、わしの様な者も力に思つて居て下さるこのわしが付いて居て見込違ひをさせちや濟まない、今度の究迫は事業の失敗から來たのぢやなく、一つは不景氣の結果、一つは好い脈に當らないのから起る、と云つて千軒鑛山が絶對に絶望かといへば、さうぢやない、こゝで少し力を入れたら、きつと驚くほどの脈に打つ衝かるだらうとは、萬人が萬人認めて居る、すれば寶の山はついでそこに見えて居るんだ、努力して目の前に横たはる障害物さへ越えて終へば手を濡らさずして莫大な利益を得られる、その障害物を取り除けるだけの金だ、さし當つては五百圓だけの融通だ、それにしても行き詰まつた、五百圓、五百圓、五百圓位は一寸した財産家の箆筒の抽斗を開いても、轉けて居るだらうと思はれる少額の金だ、それに手詰つて七顛八

倒する、人間も落目になると無慘なものだ、然し信吉これは好い修業だぞ、今朝も旦那が蒼いお顔をなすつて、有る時の五百圓は、眞の塵芥のやうに思つて、詰らない茶碗一個に費したこともあつたが、斯うして困つて見ると金の有難さが分る、茶碗や茶杓を微塵に碎いて、その缺を一つ／＼遣つた處が、飯場の奴は喜びやしない、やつぱり生で無くちやならん、有る時は芥でも、無い時は命よりも貴い、すると命の價も知た物だと、滲々被仰つたが、全く爾うだ、將來を持つた者は無駄な金を使はんものだ、何時何様事が勃發して、少しの金の用に立つ事があるかも知れないから、芥ほどの小額でも、必ず用意に貯めなきやならん、前途を持たない者は何うでも可いが、前途を持つた者は用意が要る、わしも旦那も、お日様は何時も照つて下さるものと、思つて居たのが過失だつた、夜がある、暗もある、その時の用意を何故して置かなかつたか、考へると無念で堪まらん」

その聲を一つ／＼武子は聞いた。

四

「お父さん、安心して歸つて下さい。わたし必とお金を握つて歸ります。わたしの爲めに御無心をするのぢや無い……主人の爲めにするのです。その代りわたしの體は全生涯を五百圓で打ち切るか知れませんか。さうしたら死んだものと思つて下さい。」

信吉は強い戰慄を持つた聲で言つた。五百圓の犠牲に爲つて主家の危急を救はうとの貴い心がその一言に流れる。

武子は思はず涙含んだ。花の香に包まれた夢の如な心が極めて、深い、心の香をしつかりと胸に刻んだ。福田慶三様のお名は聞いてゐる。お父さんの御存命中は、互に往來して親戚同様の御交際であつた事も知つて居る。それが一寸した行違ひで絶交同様の状態になつた事も聞いてゐる。その餘波が今の福田さんとお兄さんとの間に傳はつて、寒暑の往來も無く、冷たい生々しい壁に間を隔て、在らつしやる事も知つてゐる。その福田さんがお兄さんの前に手を支いて、僅か五百圓の御無心を云ひ込んで來らしたつたので、事情の切迫してゐる事が思ひ遣られる。

福田さんはお父さんの御存生中に一度お逢ひした事がある。赤い顔の痘瘡面でおまけに

片目で居らしつたわ。わたしは二目とは見得ないで、何と言ふ恐ろしいお方だらうと思つた。彼様お方の奥さんにお爲りなさるお方は、世界中の不幸を一身にお抱きななさるお方だと續いて思つた。もし彼のお面の如に、お心までが恐ろしかつたら現世からの鬼であると思ひもした。然し、僅許りのお金にお困りなすつて在らつしやるのを聞くとお氣の毒でならないやうな心がある。殊にこゝへ來て在らつしやるのを聞くとお氣の毒でならないやうな心がある。殊にこゝへ來て在らつしやる信吉とか言ふ御家來の忠義なお詞、お顔は見られないが、お心の美しさは目前に咲き亂れてゐる櫻よりも優れてゐる。助けてお上げしたい、助けてお上げしたい、お兄様も從來の行懸から一言に勿ね付けてお了ひなすつたらうけれど、其處に何の關係も持つてないわたしは、一度お目に掛つた事のある情誼に對し、また此れほど御主人の事を思つてゐらつしやる御親子の忠義に對し、お金を恵んでおあげしたい。

さりとしてわたしの手許にお金はないが、こゝに金剛石をさしてゐる。これを賣つたら五百圓にならないか知ら、買ふ時は高くて賣る時は廉いといふから五百圓の價格はないか知